平成22年８月１日発行

教育学部 玄関

会　報

（創立30周年記念号）

第 14 号

東北大学教育学部
同窓会仙台支部

巻頭言

仙台支部結成の思い出

１回生　**富塚　英雄**（24年入学）

小雨降る日、この日は東北大学教育学部の同窓会総会の日であった。私は川内キャンパスに向かった。ところが会場が何処か見付けかね、空しく帰ってきた。この会は教育学部同窓会の本部が開催した総会であった。会場の標示を見つけかね帰ったのだが推測すると余り集まらなかったようだ。

翌昭和55年、三浦君（当時小松島小校長）のところに藤井先生より電話があり、仙台に同窓会の支部を設立したいという要望があった。これは前年の本部同窓会総会の参加人数が少なかったため塚本会長（学部長）が藤井先生に依頼したらしい。その後、塚本先生が直接三浦君の所に仙台支部結成について依頼したと思われる。

三浦君は早速、小野・岩渕・志村・丸谷の４君に支部結成について呼びかけ準備に入った。当時私は古城小に勤務し新設２年目の教頭であった。忙しい新設校１年目も過ぎて、やっとゆとりが出てきた頃であった。暑い夏休み後半の昼下り、ボヤーッとしていると「教頭先生お客様だよ!!」という声。「誰れヤ!!　今頃……。」見ると、三浦・岩渕・志村の三君が顔を出した。「何だ、今頃。この暑いのに。」という私。「いやぁー頼みごどあってヤー」と三浦君。「お歴々、顔揃えて。何の用ヤー？」「いや～仙台に同窓会の支部を設立したいと思ってヤーあんだもお手（で）ってしてケロ!!」という三浦君。「俺忙しいけど～。新設校の方も大体形がついたから…。お手って出来るか？」

東北大学正門

この日から私も準備委員会の一員となった。「ンで、いつ頃支部総会を開くつもりヤー？」と聞くと、11月頃だと言う。「いやぁー３ヵ月もない。大丈夫がヤ？」それから委員はフル活動だった。名簿作成、規約の作成、会長・役員選出、会場決定、集める人数、総予算等々、仕事は山程ある。しかも、３ヵ月以内の仕事だ!!でも学校のことは一切きり盛り出来たので古城小を中核として事務的なことは進めることが出来た。この日以来、設立当日まで土曜・日曜を返上して仕事をやった。

第１回支部総会は昭和55年11月に仙台市民会館で開催することが出来た。当初200名を目標に人集めしたが最終的には170名程だったと思う。初代支部長には藤井先生にお願いした。当初塚本先生もご参加頂き、とても感謝された。今でも塚本先生の姿が目に浮かぶ。それから今年で30年!!思えばアッという間だった。その後懇親会だけでなく研修の場にもなり、会報も作成されるようになった。当時は会費の徴収もなかったので予算もなく準備委員が自腹で会を運営していた。その後着々と整備されこのような立派な会になった。今後はもっと会員が参集して益々盛り上がりのある支部を作り上げていきたい。皆様のご健勝と会の発展をお祈りする。

『同窓会誕生をめぐる エト・セトラ』

顧問(初代支部長)仙台市長　藤井　黎

東北大学教育学部同窓会の発足は、学部創立30周年と軌を一にする。川内記念講堂で挙行された“東北大学教育学部創立30周年記念式典”は“東北大学教育学部同窓会設立第一回総会”との二枚看板のもとに企画されたからである。昭和54年の５・６月頃の日曜日のことであった。正確な月日は確かめる余力は“今は”ないが、その年の１月１日付で、“資質不適正なり”と自ら任じて逃げ回っていた私に、仙台市教育長の辞令(おはち)が強引に回された昭和54年という年だけは確かであるし、それを実証するための忘れ難いハプニングがある。

当日、私は一人の同窓生として客席に居住まいを正していた。プログラムには開会、学部長式辞、表彰に続いて学長、知事、市長等の来賓祝辞に始まり閉会に至る恒例の次第が予定されていた。式典は定刻11時に始まり、順調に運んでいったが、祝辞を述べる筈の仙台市長代理の姿が一向に見える気配がない。不運にしてその瞬間、司会進行役の塚本教授の視線が私に向けられ、代役の指名を受けてしまったのである。男子たるがゆえに表向き慌てふためく素振りミジンもなく壇上に立ち、「市長の代理が見える気配がないので、僭越ながら市長の代理の代理としてご祝辞を申し上げる」と切り出した途端、厳粛たるべき会場の笑いを誘う始末となった。―― 以後式典も同窓会設立総会も、もちろんその後の“懇談会”も緊張感から解放されたことはいうまでもない。

仙台支部設立の話があったのは、それから数か月後のことだったろうか。第１回生の精鋭（三浦・岩渕・丸谷・志村・富塚・川井らの諸氏）の精力的な奉仕によって短時日のうちに発会を迎えることができた。

〔会報第２号より転載(抄出)〕

藤井黎氏は、平成22年４月４日ご逝去

同窓会仙台支部結成のころ

東北大学名誉教授　塚本　哲人

支部設立のころを思い出しています。あれは確か昭和50年代の半ば、学部長を務めていたころかと思います。その前の年、つまり昭和54年の６月には、東北大学教育学部創設30周年の記念の行事が行われ、同窓生各位の協力を得て「卒業生名簿」も出来たのでした。学部創設以来、旧帝大の歴史と伝統をもつ大学にあって、何とか苦渋の道を歩みながらも、先輩諸賢のご努力によって、教育学部が万事にわたって落ち着きを見せた時期と今に受けとめています。それだけに新興の気が満ちあふれていたと言えましょう。また、同窓会長は学部長に委嘱すると会則に明記されていて、体を整えた同窓会は活動することを必要としていました。

さらに、当時は同窓生の各分野での活躍が目立ち始めたと記憶してます。昭和28年、同29年の第１回、第２回の卒業生の中には、他の国公私立大学で部局長を努める事例を耳にするようになりました。特に、昭和30年代まで卒業生の大半を占めていた宮城県教員のうち、地元仙台市の小中学校に同窓生が多く、その校長さんに初期の卒業生が就任しているのに気付きました。そして、この人びとの力強い後ろ楯が市教委の教育長であることを知りました。その教育長は、昭和32年に修士過程を修了した藤井黎現仙台市長でした。

この事態で仙台支部は生れました。今になっては、藤井教育長に、また、同窓生の校長さん達に何を話したかは覚えていません。ただし、仙台支部の第１回総会に招かれたばかりか、以後数回ご案内を受けて出席したこと、退官の折には講演の機会を与えられたことなどが、懐かしく思い出されます。

〔会報創刊号より転載(抄出)〕

塚本哲人氏は、平成20年４月９日ご逝去

30周年を迎えて

支部長　阿部　琢也（36年入学）

会員の皆様には、ますますご健勝にてお過ごしのこととお喜び申し上げます。

私は、昨年10月に開催されました総会におきまして、図らずも支部長を仰せつかりました。折しも、我が同窓会仙台支部の創立30周年という節目の年と重なり、その任の重さをひしひしと感じているところです。会員の皆様のご支援ご協力のもと、職責を全うすべく努力する所存ですので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

承るところによりますと、本会は昭和55年に、教育学部１回生の精鋭の方々による献身的な労力により設立されたとのことです。

本年４月に、元仙台市長の藤井黎先生が、多くの方々に惜しまれながらご逝去されました。先生は同窓会仙台支部の初代支部長として、本会の基盤固めにご貢献されたと伺っております。

藤井先生は、仙台支部「会報」第２号に『同窓会誕生をめぐるエト・セトラ』と題する文章を寄せておられ、その中で「第１回の総会は仙台市民会館の地下展示ホールに100名を超す同窓が集う大盛会だった。」と記しておられます。

以来30年の長きにわたり、教育学部の教員養成課程の分離・独立など、同窓会を取り巻く変化の波を受けながらも、我が仙台支部が着実に歴史を刻んで今日を迎えたことは、会員一同にとって大きな誇りとするところです。

今日まで、本会の充実発展のために多大なるご尽力をいただいた諸先輩および関係各位に、心より感謝の意を表しますとともに、会員の皆様ともども、30周年を迎える喜びを分かち合いたいと存じます。

終わりに、同窓会仙台支部のますますの発展と会員の皆様の御多幸をお祈り申し上げ、お祝いの言葉と致します。

仙台支部創立30周年をお祝いして

教育学研究科長　宮腰　英一

爽やかな初夏の風が心地よい今日この頃です。皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。昨年は学部創立60周年記念式典におきまして多大なご支援を賜ると共に、教育学部同窓会に対し、在学生の海外学会発表への渡航支援金を寄贈頂き、併せて御礼申し上げます。この度、仙台支部創立30周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

今から30年前、当時の塚本哲人学部長の提案を受けて同窓会が発足したと伺っています。当時、私は大学院博士後期課程に在籍していましたが、今と比べて時間の流れが緩やかだったような気がします。

平成16年に発足した国立大学法人制度は、今年度から第二期中期目標・中期計画期間に入りました。研究科は、研究面で教育ネットワークセンターを中心に海外の大学や研究機関と積極的に交流し、共同プロジェクトを推進すること、また国際化への対応として、本学の「グローバル30」への対応と研究科独自の国際化の取組みを重点達成目標としています。特に東アジア諸国地域の有力大学と連携・協力してカリキュラム開発を行い、アジアの教育課題に応え、世界で活躍できる教育指導者育成のプロジェクトを構想しています。今後、我が国の学生にも次世代のリーダーとして、アジアの留学生と共に多文化共生社会の実現に努めてもらいたいと願っています。宮城県や仙台市は国際交流を積極的に進めていますが、研究科へのご支援・ご協力もお願い致します。

あ　ゆ　み

- 平成11年　教育学部50周年
- 平成19年　東北大学100周年
- 平成21年　教育学部60周年

「同窓会」活動に思うこと

雪江　美久（31年入学）

仙台支部同窓会が今年創立30周年を迎えたことを会員の皆様と共に喜び、これからのますますの発展を祈りたいと思います。同窓会の運営に役員として直接関わらせていただいた折に痛感したことは同窓会の運営に際して、裏方の仕事がどんなに大変なものであるのかということでした。創立以来、その任にあたってこられた事務局員の皆様方に改めて感謝申し上げると共に、同窓会の新たな発展に対しては会員一人一人の一層の力添えが重要であると思っています。

日本文化のなかで出身地や出身校が同じであるか否かとか、入社・入学・退職・卒業期等が同期であるかどうかといった「時間」と「場」の共有の度合いが、「仲間意識」の高揚に大きく作用し、集団組織の形成原理として強く働く傾向がみられることは、以前から世界的にも注目されてきているところです。同窓会や同期会等はまさにその典型的な集団組織であるといえましょう。これまで、このような集団組織の形成原理に対してはどちらかと言えばネガティブな評価が強かったのですが、近年、その見直し論が出ております。

それは急速な科学技術の発展や少子高齢化の進展等に伴い、何か不安で息苦しい生き方が強いられがちな現代社会にあって、「癒し」や「人と自然とのつながり」、あるいは「人間同士の絆」の重要性が再認識され、そこで日本文化の基層にあった集団組織の形成原理が一定の条件のもとでは重要な役割を果たすことが理由になっています。

30年の歴史を刻んできた仙台支部は事実をもって前述の見直し論の正当性を実証してきていると思いますが、これからのことを考えると、それに加えてもし可能であるならば、内部志向的技能に加えて教育の重要性が叫ばれているこんにち、教育の専門家集団としての特色を存分に活かした外部志向的な視点の導入にもチャレンジしていくことが期待されているように思われます。

事務長時代の思い出

伊藤　　昭（35年入学）

平成９年の秋の役員会でのことだった。事務長さんが体調を崩されて入院加療する事態に。代わって私にこの任を是非ともということに。しょせん浅学非才の私には荷が重過ぎることは重々自覚し実感もできていたのであるが。

私が在任中の支部長は、宮城教育大学の雪江美久教授と若きリーダー関口隆氏のお二人だった。

雪江美久教授は、会議が始まる直前、私が準備した資料を一目しただけで素早く大意や趣旨を把握して的確な判断をなされ、スムーズに会を進行していただいた。関口隆氏は会員の事情や社会の変容にいかに対応していくべきかを思い描き改善の手を加えていかれた。お二人の実践力やご指導ご助言に支えられて無事任を終えることができたことを深く感謝している。

大学卒業以来、泉豊君と共に在仙の同級生に声掛けして、毎年ささやかな会を開いていた。とても心地よくて楽しい恒例行事になっていた。やがて、昭和35年入学者の世話役に当たることになった。以来、会あるごとに実績重みのある諸先輩の方々のこの会に対する情熱と愛着の強さに感動させられ、思考力や論理力の確かさにも目からうろこが落ちる思いの連続だった。また、この会の充実発展に真剣に取り組む同年配の仲間、そして新進気鋭の若い方々。多くの方々との楽しい交流ができたことは有形無形の良き財産となっている。

東北大学創設百年を迎えて、新しく教育学部同窓会仙台支部の会員名簿が作成された。役員会への出席者も生き生きした顔ぶれにあふれ、エネルギーの再結集による力強い門出を感じることができる。私も、皆様からの薫陶をいただきながら今後ともこの道を歩んでいきたいと願っている。

顧問 藤井黎氏を悼む

永野　昌一（28年入学）

今年４月４日、同窓会顧問藤井黎氏がご逝去された。藤井氏は我々の同窓会仙台支部の創設と、会の発展に大いに貢献されたことはよく知られているところである。病とはいえ、彼を失ったことは同窓会にとって大きな損失である。

それより約２ヶ月前の２月７日、川内萩ホールにおいて元東北大学総長石田名香雄氏の「追悼の会」が秘めやかに営まれたが、私は仙台国際交流協会に於いて石田氏の下に長く仕えたこともあり参列した。その時、藤井氏は大学総長や各界の著名人と共にステージ上におられたが、式典の途中で席を立たれたのである。こんなことは今までなかったことであり、只事ではないと思った。後日念のため失礼とは存じながら電話を差し上げたがお留守で、その後に差し上げたお手紙に対するキヌ夫人からのお手紙には非常に驚いた。本人は誰にも知られたくないし、もうお会いすることも望まないようなのでよろしくと結んであった。私はそれに従った。

藤井氏は河北新報社を経て昭和32年東北大学大学院教育学研究科（教育社会学）に進まれたが、専攻が同じであった私は、その頃から公私共に今日までご指導をいただいてきた。どんなときでも非常に丁寧で且つ親切であった。

ここに彼の人柄をしのばせる学生時代の写真がある。専攻のコンパの写真で、みんなすまして写っている中、ひとりだけ長押（なげし）にぶら下がるような格好で写っている。その人が後に仙台市の教育長、教育委員長、文化事業団理事長、国際交流協会理事長、仙台市長そして東北大学教育振興財団副会長、その他裏千家淡交会宮城支部長等各方面に活躍する大人物になろうとは誰も想像できなかったと思う。公職においては積極的に課題に向かい、真剣に「人生」と向き合ってこられた証であろう。ひたすらご冥福をお祈りするのみである。

初代支部長 藤井黎先生を偲んで

高橋　公正（25年入学）

振り返ると我が同窓会仙台支部は、昭和55年に結成されて以来、本年30周年の記念すべき節目を迎えました。発足当時の教育学部長塚本哲人先生、仙台市教育長藤井黎先生のご指導、一回生を中心とした先輩各位のご努力により、支部組織の基礎が築かれ創立されたと伺っています。

特に、藤井先生は初代支部長として、会の充実発展に鋭意尽力されました。毎年総会が近づくと会員の参加状況を調べ、記念講演の先生に失礼のないよう気配りされました。また教育長の仕事の傍ら、母校（教育学部大学院）の講師としても永年にわたり講義を受け持たれておりました。会員の中には受講された方もいるはずです。

教育長ご退任後は、教育委員長として仙台市教育の発展に尽くされ、その後仙台市長を３期12年、「新生仙台市」の復興に大きな業績を残されました。寧日なき激務の中、我々の支部総会、１月の役員会新年会には万難を排して出席され、懇親会の席では、時間の許す限り一人でも多くの会員に声をかけ、ビールを注いで廻られておりました。

昨年夏、体調を崩されたとお聞きしていましたが、10月10日の教育学部創立60周年記念式典には出席され、「今日は経済学部の会も掛け持ちで」と、とてもお元気でした。それだけに４月４日の訃報は、余りにも唐突で我が耳を疑うばかりでした。

「仙台国際交流協会理事長」「東北大学研究教育振興財団副会長」「茶道裏千家淡交会支部長」「ベガルタ仙台・市民後援会名誉会長」等の役職は、藤井先生の幅広い学識経験とお人柄によるものと敬意を表する次第です。

11月７日の仙台支部創立30周年記念総会は、先生のご意志に添うよう盛大に開催することをお誓い致します。どうか今後とも末永く我が仙台支部を見守って下さい。ご冥福をお祈り致します。

皆参加30年、感慨しばし

今野　健（31年入学）

今年の総会看板に「第31回」と標示することになります。総会看板との関わりがあるだけに、大きな節目を迎えた30年の経過には感慨深いものがあります。総会・懇親会を無欠席だった会員は、10年程前には３名おりましたが、現在は、私一人となってしまいました。皆参加30回、即30年、忘れ難く、得難い体験や思い出が山ほどあります。

市民会館の地下ホールで開催された設立総会の光景が目に浮かびます。当時私は、富塚さん、鴇田徹男さんと共に南小泉小に勤めていました。秋のある日、私達は、富塚さんから総会正面標示の看板運びを依頼されました。同窓の先生が作った大看板を上杉中から会場まで運ぶというものです。幸いなことに鴇田さんの実家が運送業で、車を確保し、彼自身トラックの運転が出来るので手運びせずに済みます。無論無料奉仕です。会の運営費が乏しいと聞きました。記念すべきことなので、看板を運ぶだけでなく、総会と懇親会にも参加するようにとの勧めです。富塚さんの言は全て了承。

当日の参加者は、１～３回生が多く、県や市の教育界をリードする面々でした。後始末のこともあり、私たちは緊張のしっぱなしでした。

会場はその後、パレス平安に。会員への呼びかけを強め参加者を増やす上から、入学年度毎に理事をおくことになり、私もその任を仰せつかりました。その効果は顕著でした。第９回（昭和63年度）の参加者は157名で、今の３倍の参加者です。続く会場は、五橋会館、大学研究棟、現今のホテルへと移りました。

いつの会でも、素晴らしい記念講演があり、年度を越えた交流があり、得難い多くのものを学ばせてもらいました。宴は、縁に繋がります。歳を重ね、交流を続けることによって、同窓の人への親しみと会の魅力とが増してきます。健康の許す限り、役割も続けさせて頂くようにと願っています。

教育学部同窓会を支えよう

關口　隆（37年入学）

昭和63年度支部の仕事に携わる機会を頂いた。

その当時の資料によると、約200名に総会案内状を発送。70～80名の会員が総会・懇親会に毎回のよう参加されていた。総会１週間前や総会終了後当日に同年度の同期会を持つ年度会もあり、参加者が170名を越えることも珍しくなかった。

平成５年度から事務局を担当することになった。各年度同期会幹事のご協力とご理解のもと、各年度名簿活用の許可を頂き、平成８年度会員名簿を作成した。1,511名の会員が把握できた。

平成９年度から年会費をいただき、年一回の会報発行が可能になった。発行にあたっては、会報発行委員のご尽力があったことは言うまでもない。また、これまでの各号に寄稿して下さった会員各位、更には各号にカットを寄せてくださった方にも御礼を申しあげたい。今回の第14号は例年の３倍の12ページで記念号である。

また、平成19年には、名簿作成委員会のご努力により、名簿が発行された。この名簿は、昭和45年以降の卒業生の名前が掲載されている。大学では、その同窓生の探し出しをしてくれている。

さらに、昨年教育学部創立60周年記念式典の折には、教育学部の大学院生および博士課程の研究生が海外での研究発表やシンポジュームに参加する際の旅費の足しにと補助金を寄付することもできた。会報15号には、その報告を期待するところである。

ところで、大学に教員養成課程がなくなってから今年は40年目。現在年間80名が入学するが、県内高校出身者は非常に少ない。また、卒業後県内に就職するものも極端に減少している。総会などで、若い会員との交流を通して、仙台支部会員の拡充に努めなくてはならないと思う。

懇親会風景
（故 多田滋氏提供）

講師の菊池武剋先生（今野健氏提供）

“思い出”

懇談のひととき
（故 多田滋氏提供）

藤井黎さんを囲んで（今野健氏提供）

学生歌
「青葉もゆるこのみちのく」
（昭和28年度選定）

青葉もゆる　このみちのく
今ここに　はらから　われら
力もて歌う　平和の讃歌
われらこそ　国のいしずえ
理想ある　生命は常に美し
さらば　生きん
友よ　生きん
あゝ　東北大
あゝ　東北大

東北大学創立100周年記念祭のひとこま（正門前）

“青葉もゆる…”を声高らかに
（今野健氏提供）

随　想

大学山岳部と海外の山々

三橋　亮一（26年入学）

東北大学山岳部は1949年の学制改革により、旧制の山岳部から引き継がれた。

初期の山岳部は、敗戦後で満足な食料も調達できず、装備も不十分ななかでの活動であった。

1965年までは遭難事故も少なくなかった。この間に８名の部員の尊い命が失われている。

このような事態改善の方策として、東北大山の会（ＯＢの会）により、海外の山への遠征が提案され実現される運びとなった。

海外へ目を向ける指針として、日本では経験することのできない山、即ち富士山より高い山、氷河登攀のある山、未踏峰であることがあげられた。また、隊の特色を生かした学術調査の実施も加えられた。

第１回初めての海外遠征は、1969年アラスカ、続いて1973年南米アンデス、1976年カラコルム、1986年チベットの山々の初登頂に成功している。

1968年海外へと目を向けて以来、幸い死に至る遭難事故は起こさずに経過してきている。

1986年以降部員減少により、大規模な遠征は途絶えていた。また、山岳部は入部希望者皆無の時期があり、一時は廃部を検討せざるをえない事態にも追い込まれた。

これに危機を感じた学内ＯＢの勧誘活動により、部員を獲得し活動は続けられている。

昨年７月チベットの未踏峰を目指し、現役２名ＯＢ３名の隊を編成した。中国の諸許可を得ていたにも拘らず、中国側の事情により最奥の部落から先に進めず、登攀を断念せざるを得なかった。

今や海外における登山も規模の大きな隊は組織できず、数人でのアタックに移行している。

未知の山岳への憧れを実現すべく、励んでいる部員の姿に、頼もしさを感じる今日この頃である。

北六校舎　小山喜三郎氏（「ふたば」より）

同期生群像

桂島　新一（28年入学）

昭和28年入学生は、1995年　還暦を迎えたので記念誌「ふたば」を発刊（編集長　清水善衛）しました。巻頭言で会長伊達亮彦は次のように述べています。「双葉から大樹へ」と。

この時、恩師から玉稿を賜りました。橋浦兵一先生・遠藤栄一先生・山西謙二先生・塩田安男先生・黒川七郎先生・海鉾修先生・大塚徳郎先生・大泉ふさ先生。

この年、河北新報年鑑の東北人名録宮城県欄に掲載された人は５人でした。

- **小山喜三郎**（おやま　きさぶろう）
  職：東北大学工学部講師　宮一女教諭
  　　河北美術展顧問　県芸術協会評議員
- **大泉　　勉**（おおいずみ　つとむ）
  職：宮城教育大教授
- **鈴鴨　清美**（すずかも　きよみ）
  職：宮城県教育長
  歴：県教育次長　仙台一高校長
- **高倉　　健**（たかくら　たけし）
  職：陶芸家　歴：河北工芸展顧問　日展会友
- **永野　昌一**（ながの　しょういち）
  職：仙台市教育局理事兼次長
  歴：教育局社会教育部長　総務局職員研修所長

2004年、古希を迎えたので記念誌「ふたば」を発行（編集長　永野昌一）しました。この中で最高年齢者　遠藤光雄は次のように書いています。「長い年月をかけて醸成された友情」と、

最後に、本多修郎先生の歌を紹介して　拙稿を終わりにします。

"しわしげき頬にようやく血の気さし
　　老いたる友は世を嘆くなり"

同期会だより

「双葉会」に乾杯

小關　幸生（28年入学）

私たちの同期会は、入学年度にちなみ「双葉会」といっている。専攻別やサークル毎のグループはあった様だが、全体として纏まったのは昭和50年代。会則には、「昭和59年２月４日から実施する」と記してある。会長は発足以来、伊達亮彦さんにお願いしている。

現在の活動は、年１回の総会。今年で25回、10月９日、ハーネル仙台を予定している。この準備等の役員会は年３回行っている。

会報は、平成９年から毎年発行を続け、現在（昨年12月発行、Ｂ５版28ページ）13号まで発行している。内容は、総会報告、会員の近況報告や投稿文などバラエティーに富んでいる。

特記すべきことは、還暦、古希を迎えての記念誌発行である。共に、Ａ４版、厚表紙付きの立派なもので、内容的にも充実している。恩師の言葉、会員の寄稿文、入学許可証や初任から定年までの給料表、青春時代の写真等々、良くこれだけの資料を集め、纏め上げたものと自負している。

現在は、年会費を1000円納めてもらい、約130名の方々に総会案内、会報を届けている。

「古希を迎えて」

金岡　昭房（33年入学）

わが同期会は、その入学年度の数字から33会その他には燦々会と称している。会員の人生が燦々と輝いてほしいという願いである。中には散々（苦労する）会等の異称をたてまつる人もいるようだが、それは、嫉妬のようだとあまり気にしないことにしている。それほど集まった輩の間は、気のおけない楽しい一刻を過ごせているのである。

さて、そんな会員も、今年３月で全員が古希を迎えた。人生の節目とも言えるこの時、会員の情報として、古希を迎えた感想を求め、今年度まとめて発行する予定にしている。この稿が載るころには多分、会員に届いていると思う。

昨年10月に、古希を祝うということで、遠刈田温泉の「バーデン家壮鳳」で一泊の同期会を行った。集まったのは14名と、やや寂しい気持ちにならないわけではないが、なにしろ、教員という職業が中心だった故もあり、各人地域で用いられており、中々、集まれる状態にないのが現状である。最盛のときは30名もの集まりもあったことを考えると隔世の感が無いではないが、幹事としては元気なうちと引き受けている次第である。

まとまりのいい会

軍司　　啓（39年入学）

我々39年入学組は教員養成最後の入学組でしたので、学生時代からまとまりがよく積極的でした。

同期会をやろうと在仙有志が、松田会長（永年保持）・岩井・鹿野等を中心に会が始まりました。次回の幹事（同窓会理事兼務）は、会当日の勢いで決定するということで、５年に１回の会を続けてきました。全員が定年を迎えたときに、５年も待てないということで、３年に１回ということにしましたが、前回は４年目に実現しました。

今までは、全国に散らばった全員に呼びかけていましたが、次回からは、宮城県・仙台を中心に連絡を取り合い、全国の方々はだれかから情報が入ったら集まってもらうことにしました。

でも、準備会と反省会が楽しくて仕方がない連中の集まりですので、次々と幹事を引き受けるか押しつけられるのかで、同期会は続きます。

歴代同窓会支部長

初代	藤井　黎	昭55年～
2代	三浦修一	昭61年～
3代	多田　滋	昭63年～
4代	佐々木一洋	平3年～
5代	永野昌一	平6年～
6代	雪江美久	平9年～
7代	關口　隆	平13年～
8代	岡崎　忠	平20年～
9代	阿部琢也	平22年～

他支部だより

関東地区同窓会の現況と課題

支部長　笹川智恵子

関東地区同窓会の活動の基本は、２年に１回、11月に開催される総会・懇親会と、その案内もかねた会報『きょうかん』を10月に発行することにあります。

同窓会の歩みをふりかえってみますと、平成元年に105名の出席者を得て設立、同３年に第１号『きょうかん』を発行して出発しました。創刊号の、会報名を教育学部関東地区同窓会にちなみ「教」と「関」を採り仮名書きで「きょうかん」としたこと、さらに「きょうかん」には、仙台での日々によせるお互いの「共感」、学びの故郷を旅立ってきた者としての「郷関」の思いを託した、という部分には、諸先輩方の意気込みと熱い思いを感じます。

記憶に新しいところでは、平成20年５月の、創立20周年を迎えた記念として「学びの故郷　仙台を訪ねる旅」があります。学生時代とは様変わりした、しかし、緑の美しさは変わらないキャンパスでの、先生方や仙台支部の同窓会の方々との交流はとても意義深いものでした。わずか４年間の学生生活でしたが、自分のなかに消えないでいるバックグラウンドの有難さを実感もしました。

歩みをふりかえって感じることは、回を重ねるごとに減少傾向にある総会出席者数です。この悩みは関東地区にかかわらず、どちらの同窓会にもあるのではないでしょうか。

若い層の開拓だけでなく、現在の会員さんに出かけてみようかなと思ってもらえるような同窓会の在り方を模索しなければ、と考えます。支部同士の交流や密な情報交換、合同総会の企画などを検討事項のひとつとしてあげたいと思うのですが、いかがでしょうか。

歴代教育学部長・同窓会長

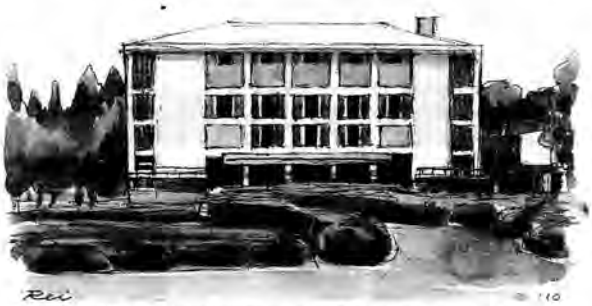
① 細谷恒夫　昭和24年度（講座開設）
② 松本金寿　昭和28年度～
③ 塚田　毅　昭和33年度～
④ 皇　晃之　昭和36年度～
⑤ 林　竹二　昭和40年度～
⑥ 原田政美　昭和42年度～
⑦ 水野弥彦　昭和43年度～
⑧ 岩下新太郎　昭和47年度～
⑨ 荒井　武　昭和51年度～
⑩ 塚本哲人　昭和55年度～
⑪ 佐々木徹郎　昭和57年度～
⑫ 田原音和　昭和59年度～
⑬ 細谷　純　昭和63年度～
⑭ 松井一麿　平成４年度～
⑮ 不破和彦　平成８年度～

平成10年度より講座等組織の変革により教育学研究科長となる。教員養成課程が分離された。

⑯ 菅井邦明　平成12年度～
⑰ 菊池武剋　平成14年度～
⑱ 荒井克弘　平成17年度～
⑲ 細川　徹　平成19年度～
⑳ 宮腰英一　平成21年度～

歴代同窓会支部事務長

① 富塚英雄　昭和55年度～
② 石森幸子　昭和63年度～
③ 枡澤　怜　平成３年度～
④ 關口　隆　平成６年度～
⑤ 伊藤　昭　平成14年度～
⑥ 關口　隆　平成20年度～



東北大学百周年記念館「川内萩ホール」

東北大学教育学部同窓会仙台支部会則

［名称］第１条　この会は，東北大学教育学部同窓会仙台支部と称し，事務局を事務局長宅に置く。

［会員］第２条　この会の会員は，原則として仙台圏に居住する教育学部同窓生及び本会の趣旨に賛同する者とする。

［目的］第３条　この会は，会員相互の親睦を図り，東北大学教育学部同窓会との連絡提携を緊密にすることを目的とする。

［役員］第４条　この会の役員は，次のとおりとする。

・支部長　１名　・副支部長　３名　・年度理事　若干名
・大学理事　１名　・監事　２名
・事務局長　１名　・事務局員　若干名　・会計　３名

［役員の任務］第５条・支部長は，会を代表し，会務を総括する。

・副支部長は，支部長を補佐し，支部長事故あるときはその職務を代行する。
・年度理事と大学理事は，年度会員の代表としてこの会の運営にあたる。
・監事は，本会の会計を監査する。
・事務局は，会の全体計画及び事務全般にあたる。

［役員の選出］第６条・支部長，副支部長は，役員会に諮り，総会で決定する。

・年度理事，監事，事務局長等は，支部長が委嘱する。

［役員の任期］第７条　役員の任期は２年とし，留任を妨げない。

［顧問及び参与］第８条　この会には顧問及び参与を置くことができる。

・顧問及び参与は，役員会に諮り総会で決定する。
・顧問及び参与は，この会の諮問に応じ会務に参与する。

［委員会］第９条　この会の目的達成のため，次の委員会を置く。

・会則作成委員会　会則の見直し，原案の作成にあたる。
・名簿作成委員会　会員の名簿を管理し，必要に応じて加除訂正する。
・会報発行委員会　会報を発行する。
・会計委員会　予算案の作成，管理，執行にあたる。

［会議］第10条　会議は，総会・役員会・委員会とする。

・総会は，年に１回開くこととする。ただし役員会の要請により臨時に総会を開くことができる。
・役員会及び委員会は，必要に応じて開くこととする。

［会計］第11条　この会の運営は，会費・その他の収入をもってあてる。

・会計年度は，４月１日で始まり翌年３月31日までとする。（平成20年度から）

総　会　開　催　日

回	開催年月日	回	開催年月日	回	開催年月日
結成大会	昭和55年11月29日	第12回総会	平成３年10月12日	第23回総会	平成14年11月16日
第２回総会	昭和56年11月14日	第13回総会	平成４年11月21日	第24回総会	平成15年10月25日
第３回総会	昭和57年11月13日	第14回総会	平成５年11月20日	第25回総会	平成16年10月30日
第４回総会	昭和58年11月19日	第15回総会	平成６年12月10日	第26回総会	平成17年10月29日
第５回総会	昭和59年11月17日	第16回総会	平成７年12月16日	第27回総会	平成18年９月30日
第６回総会	昭和60年11月30日	第17回総会	平成８年11月23日	第28回総会	平成19年10月20日
第７回総会	昭和61年11月22日	第18回総会	平成９年11月24日	第29回総会	平成20年９月20日
第８回総会	昭和62年11月21日	第19回総会	平成10年11月14日	第30回総会	平成21年10月４日
第９回総会	昭和63年11月５日	第20回総会	平成11年11月20日	第31回総会	平成22年11月７日
第10回総会	平成元年12月２日	第21回総会	平成12年10月７日		
第11回総会	平成２年11月17日	第22回総会	平成13年11月17日		

仙台支部役員名簿

（平成21.10.4～平成23総会時）

顧　問	26	佐々木一洋	大学	宮腰　英一
	28	永野　昌一	31	雪江　美久
	36	岡崎　忠		
支部長	36	阿部　琢也		
副支部長	39	軍司　啓	39	渡邉　宣隆
参　与	24	岩淵昌次郎	24	富塚　英雄
〃	29	石森　幸子	31	枡澤　怜
〃	32	佐々木亀三男	33	佐藤　健仁
〃	35	伊藤　昭	39	大浪　榮一
〃	元科長	菅井　邦明	元科長	菊池　武剋
〃	同	荒井　克弘	同	細川　徹
理　事	24	佐藤　弘		
〃	25	髙橋　公正	25	菊池　康雄
〃	25	静田　一		
〃	26	三橋　亮一	26	池田　和夫
〃	27	青木　敏浩	27	佐藤　陽二
〃	28	小關　幸生	28	桂島　新一
〃	29	市川　宏	29	佐藤庸太郎
〃	30	秋山　恭廣	30	千葉　俊男
〃	31	今野　健	31	沼田嘉一郎
〃	31	渡邉　健夫		
〃	32	煤田　泰蔵	32	村上　重作
〃	32	竹澤錬太郎		
〃	33	金岡　昭房	33	山形美也子
〃	34	工藤　忠久		
〃	35	泉　豊	35	岡本　幸子
〃	36	正木　競		
〃	37	賀屋　義郎	37	中川義二郎
〃	38	亀谷　芳彦	38	文屋　國昭
〃	39	朴澤　徳昭	39	遠山　正彦
〃	39	大竹　牧夫	40	吉野　信武
〃	41	安住　裕	48	櫻田　博
〃	50	別府　成裕	50	吉川　邦彦
〃	51	日下　毅	51	佐藤　邦彦
〃	52	白澤　利広	54	南城　一之
〃	57	川上　芳夫	H 4	吉植　庄栄
監　事	37	荒木　聰恵	48	笹田　博通
大学理事	48	笹田　博通	H元	神谷　哲司
事務局	37	關口　隆	39	大竹　牧夫
〃	50	吉川　邦彦		

事務局だより

下記のように委員会を構成し、それぞれ活動を展開しております。

会則検討委員会

委員長	31	枡澤　怜		
副委員長	31	今野　健		
委　員	25	静田　一	28	桂島　新一

名簿作成委員会

委員長	33	金岡　昭房		
副委員長	35	泉　豊		
委　員	25.	髙橋　公正		

会報発行委員会

委員長	27	青木　敏浩		
副委員長	39	渡邉　宣隆		
委　員	25	菊池　康雄	26	池田　和夫
〃	32	佐々木亀三男	34	河野　好郎

会計委員会

委員長	29	石森　幸子		
副委員長	39	朴澤　徳昭		
委　員	35	岡本　幸子	37	佐藤　勝子

30周年会報編集委員会

委員長	青木　敏浩
副委員長	佐々木亀三男
委　員	河野　好郎・今野　健・渡邉　健夫

あとがき

◎会報第14号（30周年記念号）をお届けします。ご多用の中、玉稿をお寄せ頂きました方々に、心から感謝申し上げます。

◎教育学部創立より61年、同窓会創立30周年を迎え、我々の同窓会の流れを辿ってみました。過ぎ去りし学生時代の思いや社会人として激動の時代を生き抜いた自己の歴史を振り返るよすがにして頂ければ幸いです。　（青木）

事務局（連絡先）
〒982-0807　仙台市太白区八木山南３－14－13
關口　隆　TEL 022－244－2091

※カットは枡澤　怜氏（31年入学）